ESSAY

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。
氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#37
フェリーニとリミニ

リミニ Rimini

イタリア半島の東、アドリア海沿岸の都市リミニは、ローマ時代を起源とする海運と漁業の街である。世界最古のミニ国家 サンマリノ共和国の玄関口としても知られている。

是非一度リミニを訪れたいと長年思っていたのが最近実現した。それは僕が幼少から巨匠と崇めていた映画監督 フェデリコ・フェリーニ生誕の地であるからだ。

フェリーニの足跡を辿る旅はまずリミニ旧市街の散策から始めた。旧市街の一角にある駐車場に車を停め、紀元前に着工したというアウグストゥスの凱旋門からスタートする。街の中央にはシーザーの銅像が。旧市街外れの川に架かる石造りの紀元前に造られたティベリウス橋は、今でも人や車が通行しているのに驚いた。ローマ軍は工兵が非常に優れていたと言われているが、イタリア各地に残るローマ遺跡の堅牢さと技術力の素晴らしさに何時も感嘆する。

川を渡ってすぐのトラットリアでランチを。歩きまわって多少汗ばんでいたので、まずは地元産の無濾過フリツァンテで喉を潤す。魚介たっぷりのリミニ特産手打ちパスタ“パッサテッリ”で満腹。リミニのリストランテの殆どが魚介料理専門だという事が数日の滞在で納得。さすが漁業が盛んな街であることを再認識した。

6月のリミニは既に初夏の日差しが強く、砂浜の続くビーチにはパラソルの花が咲いていた。新市街の真ん中を流れる運河の両岸はマリーナPorto Canale Riminiになっていて、多くの船がシーズンに向け準備をしている様だ。運河が流れ込む海に面したYacht Club di Riminiを散策する。600隻収納のマリーナは最大150フィートの船まで係留出来るとの事。人口10万人程の街でも、この規模のマリーナがイタリア中何処にでもあるのを羨ましく思う。因みに係留費は日割り計算で、1ヶ月毎に割引があり、1年契約だと半額となる。仮に40フィートとすると保証金無しの年間60万円程だから、日本に比べれば格安である。

リミニの旧市街には紀元前のローマ時代の遺跡が幾つも残っている。ティベリウス橋には今でも車や人が行き交い、凱旋門や闘技場は今から1,000年でも残るだろうと思えるほど、堅牢な佇まいを見せている。街の中央広場にはシーザーの銅像が。彼の率いるローマ軍勢に「賽は投げられた」という有名な言葉を残したルビコン川は、リミニのすぐ北を流れてアドリア海に注いでいる。

フェデリコ・フェリーニ Federico Fellini

中学生の頃、初めてフェリーニの『甘い生活(La Dolce Vita)』を劇場で観て、よく分からないが何か不可思議で映像の美しさに大いに惹かれた。それからは『8 2/1』や『サテリコン』等、作品が発表される度に彼の映像の虜になっていった。アメリカン・ニューシネマ以前はイタリアとフランス映画全盛の時代だったから、それはごく自然の成り行きだった。

イタリア映画界に大きな足跡を残した巨匠フェリーニはリミニで生まれ、幼少期を過ごす。1973年製作の『アマルコルド(Amarcord)』はリミニの旧市街を中心に、フェリーニ幼少期の回想録と言われている。難解なフェリーニ作品から比べるとコミカルかつ郷愁や哀愁に満ちていて、肩肘張らずに鑑賞出来るフェリーニ映画としては珍しい作品である。リミニの歴史ある旧市街、海あり山ありと、風光明媚な美しい情景も印象的だ。作曲家ニーノ・ロータの音楽も映像を引き立たせている。

主人公のチッタは子供ながら同じリミニに住むセクシーな美女グラディスカに憧れ、その尻を何時も追いかけている。2000年公開のジュゼッペ・トルナトーレ監督作品『マレーナ』で、モニカ・ベルッチ演じるマレーナを12歳の少年レナートは恋してしまう…。久し振りに『アマルコルド』を観直して、『マレーナ』の構想はフェリーニの『アマルコルド』に触発されたと気付いた。僕も含めて少年時代に年上の美女に憧れる経験は、多分誰にでも思い当たる甘い想い出だろう。

100年の歴史を持つ白亜の「グランド・ホテル・リミニ」は、フェリーニ映画『アマルコルド』の舞台になった5スターホテルである。ライトアップされたロビーから続く庭園の美しさは格別だし、その後上映された名画「La Dolce Vita」からその名をとった優雅なメインダイニングには彼の写真が飾られ、まるでフェリーニの世界に引き込まれた様な錯覚に襲われた。

グランド・ホテル・リミニ Grand Hotel Rimini

「グランド・ホテル・リミニ」は海に近いリミニのフェリーニと名付けられた公園に佇む、100年以上の歴史を刻む5スターの素晴らしいクラッシックホテルだ。兼ねてからこのホテルに滞在したいと念願していたことが漸く実現した。決して裕福では無かったフェリーニは幼少期に、紳士淑女の出入するこのホテルに憧れ、よく遠巻きに眺めていたと言う。その思いが『アマルコルド』に描写されている。

エントランスホールにはベネチアングラスのシャンデリアが輝き、続くテラスと美しい庭園は、『アマルコルド』の映像そのものである。特筆すべきは、ホテルのメインダイニングの名が「Dolce Vita」である事だ。フェリーニのみならず、このホテルは幼少期から今に至る僕自身の歴史の一部と言ってもいいかも知れない。

「Dolce Vita」での夕食はヴェネチア北部産、イエルマンのウエアー・ドリームス(Where Dreams)に合わせてscampiのグリルを。壁にはフェリーニの往年の写真が何枚か飾られていた。リストランテ「Dolce Vita」で“夢を求めるワイン”とは、我ながら素晴らしい取り合わせだ……と自己満足に浸るひと時だった。**P.B.**

Profile

伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。